

中井和夫先生を送る言葉

安 岡 治 子

中井先生とのお付き合いは、私が駒場に赴任して以来なので、今年でちょうど二十年になる。最初の印象は、「キョーコマ、トーダイ、ハーヴァード」ご出身の知的エリートに相応しく俊英そのもの、しかも今よりややほっそりとした白晢の美青年の面影もあり、ほとんど近づき難い存在だった。しかし寡黙ながらも若輩に細やかな心遣いをなさる方であることは、私が四月に当初入る予定だった研究室から別の部屋に引っ越す時、すぐにわかった。ロシア東欧科の会議でそんな話題もたしかに出たのだが、引っ越し当日、遠い2号館の研究室からわざわざ手伝いに来てくださった時に、私は大層驚くとともに、ああこれが駒場の gentlemanship なのだなと感じ入ったものである。

中井先生が駒場の後期課程や大学院で指導されてきた学生数は、群を抜いて多い。院だけに限っても、地域文化研究専攻、国際社会科学専攻、HSP などの複数の組織に亘り、院生たちの研究テーマに至るや、ヴォルガのドイツ人、日露関係史、リトワニアのユダヤ人問題、ウクライナの言語政策、古代騎馬遊牧民スキタイの文化史など、実に多岐に亘っている。これだけの多様性をもつ多数の院生の教育指導に当たることができる先生は、駒場広しといえどもそう多くはないだろう。火曜5限の中井ゼミは、常時15人から時には20人近くの多種多様な院生が集まり、互いの研究テーマの時代、地域、ジャンルの差を超えて、活発な議論を交わしながら切磋琢磨し、多くの者が博士号を取得し、既に教職に就いている者も少なくない。

今、私の目の前には、先生の主著が五冊並んでいる。どれもが、基本はウクライナの歴史、民族、政治、言語を扱ったものであるが、今回あらためてこの中から『ウクライナ・ナショナリズム、独立のディレンマ』を読み直してみると、先生の研究対象のウクライナそのものが、「東」と「西」の相異なる特性を併せ持つ実に多様性に富んだ地域であることがよくわかる。「東」とは、一つは勿論、ロシアであるが、言語も宗教も民族さえも、ウクライナ東部や南部の一部などは、ロシアの占める割合がかなり大きい。また、ウクライナの「自由」の象徴でもあるコサックの起源は、クリミア汗国時代に登場したトルコ系クリミア・タタールの集団であったという。それに比して西部は、ガリツィアを筆頭に、西欧の文化や宗教の影響が非常に色濃い。中井先生の豊富な知識と深い理解、そして明晰な分析に基づく記述のおかげで、ウクライナとは実に興味深く研究し甲斐のある魅力的な地域であると、しみじみ思われるのである。

歴史の記述は、ヒストリーであると同時にストーリーとしても面白くなくては読み手を魅了しない。中井先生は、姉上が作家、奥様がドイツ文学者という家庭環境のおかげで、文学的センスにも秀でておられると思う。ヤルタのリヴァディア宮殿の庭園のベンチに、日がな一日座って物思いに耽っていた最後の皇帝ニコライ二世の描写「その名のおとりあくまで深い暗緑色の黒海の水平線に沈む夕陽を見ながらニコライは何を考えていたのだろうか。ツァーリ一人ではどうすることもできない病んだ帝国の重荷にじっと耐えていたのだろうか。あるいは家族の行く末を案じていたのだろうか」などは、文学作品のようではないか。

それにしてもウクライナとロシアの関係は複雑である。ロシアはあくまでもウクライナを自分の弟か、自身の肉体の一部のようなつもりでいたのだから、ソ連崩壊後、バルト三国や中央アジアはともかく、「スラヴの兄弟」にまで見放された時は、深刻なアイデンティティの危機にさらされたに違いない。一方ウクライナは、ロシアに対して常に文化的優越感を持ち、何度かの抵抗・離反を繰り返しながらも敗北し、またもや「ロシアの植民地になった」と思っていたのだという。

こうしたロシアとウクライナの間を考えると、つい、地域文化研究とはそもそも何なのかという根本的な問いかけをしたくなる。冷戦時代の米国のソ連研究など、地域研究とはそもそも敵国研究であったかもしれない。しかし、或る地域を研究対象として、その地の歴史、文化、宗教、民族などを深く理解するには、どうしてもその地に対する愛情が必要であろうし、研究が深まるほど、愛情も濃くなるように思う。中井先生のウクライナに対する愛情は大変濃密なもので、深まることはあっても薄らいでゆくものではないが、研究者としての冷徹な眼差しも併せ持っておられ、それはご著書の随所に、何よりもタイトル中の「ディレンマ」という言葉に表われている。ソ連崩壊後、漸く初めて独立国家を形成したウクライナに対して、そこにはなお、ディレンマというべき問題があることを見逃しておられない。さらにそこで突き放すのではなく、何とか国民統合の方途を探り、連邦制、ユニエイト型のアイデンティティの模索などを提案しておられるのだ。これは、しばしばロシアの最良の引き倒しになってしまう私にとって、見習わなければならない点である。

中井先生は、このようにご自身の研究によって学生も同僚も啓発し続けてこられた方だが、駒場ではまた、人一倍学内行政の重責もこなされた。地域文化研究専攻の主任になられたとき、「今までの専攻長は、押しが強いが腰が低いかのどちらかでしたが、私はどちらでもないの、うまく務まるかどうか」と謙遜なさったが、きめ細やかな気遣いをなされる心優しい面と、譲ってはならない所では梃子でも動かない、時には「ガンコフ」か「ガンコフスキー」とでもお呼びしたくなる面を折々に使い分けられる実に有能な方であった。

アカデミックな面でも拙い私は、行政面でも至らぬ点だらけで、しばしば中井先生を

苛々させたと反省している。ロシア東欧小地域のことは、何から何までどんな些細な事でもご相談し、その都度、的確なご判断やご指示をして頂いていた中井先生が駒場を去られると思うと、真に心細い思いである。とは言え、これからは少しゆっくりなされる中井先生に、21 世紀に入ってから東と西を繋ぐ存在として益々目が離せないウクライナについて、じっくり教えて頂きたいと思う。先生の益々のご健康とご活躍をお祈りいたします。